

# E・W・バージェスの社会政策論

## —社会改良・計画・福祉の展開—

西川 知 亨

### 要 旨

初期シカゴ学派の重要な社会学的方法の一つは、人間生態学である。しかしそれと同時に、人間生態学の対概念とみなされる社会政策論にもシカゴ学派の社会学者は関心をもっていた。本稿では、人間生態学的視点における同心円地帯理論で有名な、E・W・バージェスの社会政策論に着目する。バージェスの社会政策論は、1910年代の社会改良、1930年代の社会計画、1950年代以降の社会福祉の考え方へと展開していったことを、バージェス文献の比較検討によって示す。1910年代の社会改良は、シカゴ学派第一世代の実践社会学の思潮に影響されている。1930年代の社会計画は、「科学」にもとづく社会学が構想されたことによる。1950年代以降のエイジング・老年社会学研究は、これまでのシカゴ学派研究では軽視されてきた社会福祉論であり、それは近代化論を背景としている。バージェスの社会政策論は、社会政策・福祉論において現代議論すべき論点の多くを原初形態として示している。

キーワード：バージェス、社会政策、社会改良、社会計画、社会福祉

### 1 はじめに

初期シカゴ学派の社会学者が用いた社会学的方法のひとつは、人間生態学である。とりわけ、初期シカゴ学派の「巨匠」の一人、E・W・バージェスに関しては、社会学の教科書にもよく登場する「同心円地帯理論」における、生態学的視点が強調される。すでに別稿で詳しく論じたように、シカゴ学派の社会学的方法のなかで、人間生態学が重要な位置を占めていることは間違いがない（西川 2003a, 2003b, 2004）。では、「自然な」プロセスが強調される人間生態学の対概念とされる「社会政策」については、初期シカゴ学派の社会学者はどのようにとらえていたのであろうか。

本稿では、シカゴ社会学史のなかでも、人間生態学とは相反する概念とされる「社会政策」にとくに着目する<sup>1)</sup>。そのため、バージェスのさまざまな業績を概観しつつ、とりわけ、社会

---

1) たしかに、社会政策論と生態学的視点は、「作為か自然か」という点から見て、相反するものにとらえられている。しかし、この2つのパースペクティブは、共存不可能なものではない。その例として、バージェスの「非行」のとらえ方を挙げてみよう。バージェスの非行に対する関心は、バージェスが自分の弟子である有名な非行研究者、クリフォード・ショウの『ジャック・ローラー』に寄せた『論考』にあらわれている。バージェスは、『ジャック・ローラー』の主人公であるスタンレー少年の自伝と、科学と計画

政策と深いかかわりを持たせている3つの時期のテキスト、つまり1910年代のソーシャル・サーベイについて論じたテキスト、1930年代の社会計画とモーレス（モリーズ）について論じたテキスト、1950年代以降の老年社会学のテキストに依拠しながら比較検討をおこなう（Burgess 1916, [1925] 1967, 1927, [1930] 1966, 1935, 1945a, 1945b, 1950, 1954, 1955, [1957] 1974, 1960a, 1960b, 1960c）。バージェスは、彼が補佐した1920年代のシカゴ学派社会学の最重要人物とされるR・E・パークに比べて、社会学の実践的で社会工学的な側面に関心を寄せていたといわれている（Janowitz 1972, 1973）。その意味で、パークではなくバージェスの社会政策論を取りあげて論ずる意義があると考えられる。もちろん、現在の日本のアメリカ社会学史研究の文脈、あるいはシカゴ学派の神話の脱構築という意味では、シカゴ学派が社会政策の視点を有していたという事実を指摘するだけでも十分だという意見もあるかもしれない<sup>2)</sup>。だが本稿の主眼は、主に1910年代、30年代、50年代以降の当該の文献を比較検討することで、当時の社会的な政策論に、現代の論議に連なる視点があることを示すところにある。言い換えれば、バージェスの社会政策論の展開過程から、現代の社会政策や社会福祉の諸問題の一つの原初形態を析出できるのである<sup>3)</sup>。

バージェスの社会政策論には、他の多くの初期シカゴ学派の社会学者による研究と同じく、近代化論の枠組が導入されている。無論、バージェスでなくても、社会政策論は、近代化論の文脈で登場する議論である。なぜなら、社会政策は、何らかの「社会問題」に対しておこなわれるものであり、その社会問題の多くは、近代社会の社会権の考え方があるために提唱されるものと考えられるからである。とはいえ、バージェスの社会政策論は、とくに次の点で示唆を

に関して、次のように述べている。

読者にとって、この自伝は、シカゴの退廃した地域に住む少年の生活をとりまく状況にどう着手すればよいかについての基本的な方法を提示するだろう。逸脱を教え込むような風土があり、犯罪が子どもたちにとってもっともおもしろい遊びとなっているような地域に、ギャングや殺し屋の問題の第一の原因があると、読者たちは確信するようになるだろう。読者は、現在重視されている施設での矯正—それはこの本で明確に示されているように無駄なものではない—に代わって、コミュニティでの非行防止策の一貫した計画が必要だと考えるようになるであろう。（Burgess [1930] 1966=1998: 310）

このバージェスの言葉からは、重要事項として3つのみを指摘しておこう。第1に、行為者ではなくて、地域に行為者の振る舞いの原因があるという「人間生態学」（あるいはそれにもとづく社会解体論）の視点が見られること、である。第2に、その生態学的視点にあわせて、矯正や計画の視点をも有していること、である。第3に、1960年代のゴフマンの『アサイラム』や、その検討による研究に触発されて登場した「ホスピタリズム」と「インスティテューショナルリズム」の概念などによって（丸木 2000）、現在のわれわれがよく知っている「施設収容主義からコミュニティケアへ」という社会福祉領域におけるパラダイム転換の萌芽が見られることである。バージェスにとって計画・臨床的視点と生態学的視点は矛盾なく共存している。

- 2) 社会改革色の強い調査研究をおこなっていたのは、1920年代の「黄金時代」を迎える以前の、第一世代のシカゴ社会学者である。ただし、その後のシカゴ学派社会学史においても、政策的な視点がまったく欠落していた時期は、存在しないと考えられる。しかし、生態学的視点などをとりあげて、シカゴ学派の非政治性を強調する文脈では、シカゴ学派には政策的な視点がまったくなかったかのような印象を持たれることがよくある（cf. Glazer 1966: xv）。
- 3) 「福祉国家」の多様性に関する議論としては、エスピン＝アンデルセン（Gosta Esping-Andersen）の業績が有名である。だが、バージェスの社会政策論における比較考察という本稿の目的に沿い、アメリカ流のモーレスに基づく福祉国家論の位置づけについては別に譲る。

与えてくれる。第1に、人間生態学の対概念として用いられていることである。第2に、当時のアメリカ・シカゴという激動の時空間がモデルになっており、これは現代でも参考にできるさまざまなケース・スタディとなりうることでもある。第3に、方法論の面で、21世紀を迎えた現在、議論が戦わされている社会政策・福祉領域の、原初的な概念を抽出できることである。これらにかんしては、バージェスのテキストを検討した後、本稿の末尾で再び総括する。

バージェスの社会政策の考え方は、当時の社会背景やシカゴ大学社会学科の学問動向と無縁ではない。初期シカゴ学派は、社会改良の時代から黄金時代における科学の提唱の時代、科学性の成熟の時代へと展開していった（高山 1998：139-162；西川 2007）。こうしたシカゴ大学の背景を押さえた上で、本稿の目的にそってバージェスの社会政策論を検討していきたい<sup>4)</sup>。

## Ⅱ 社会改良と社会計画——1910年代から1930年代のテキスト

### 1. 社会改良と臨床的関心——1910年代

まずは、1910年代のソーシャル・サーベイ論に見られるような、改良主義的な社会政策論である。

とくにシカゴ学派の第一世代は、実践社会学に関心を寄せていた。後には、社会改良と結びついた実践社会学の考え方は影を潜めていくことになる。しかしバージェスは、生涯、臨床社会学的な考え方をもち続けた（cf. 井上 2001；藤澤 2000）。シカゴ大学で「家族社会学」の講義を初めて担当したのがバージェスであり、またアメリカで「臨床社会学」の講義を初めて担当したのも、バージェスだといわれている。エルスワース・フェアリスの子のロバート・フェアリスは、シカゴ学派第一世代のビッグフォーの一人である「ヘンダーソンは、社会学史に残る業績は何一つ残してはいない」と評している。しかし同時に、バージェスらの研究に見られる人道主義的な関心は、部分的にはヘンダーソンとの研究に起因しているかもしれないと論じている（Faris [1967] 1970=1990：35）。第一世代の創成期のシカゴ学派社会学者であり、もともと牧師であり、人道主義的な社会学を展開しようとしたヘンダーソンは、1910年代のバージェスに影響を与えていると考えられる（cf. 鎌田 2005：454-458）。ヘンダーソンはAJS創刊号に発表した、ボランティア活動にかんする論考で次のように述べている。

さまざまな組織が、資金を必要として援助の要請をしようとしていることに対して、理論家と実践家の両者とも手をこまねいている状況が現実としてある。

社会改良を試み、満足いく結果を出そうとするさまざまな種類の機関（agencies）を、簡単なながらも十分に内容をもったものだと考えることは、有用であると信じられる。というのは、思想家や慈善事業家が時間や資金を必要とするような、矛盾を抱え、騒々しさに

4) 本稿の作成にあたり、バージェスをはじめシカゴ学派社会学全般に詳しい鎌田大資氏（椋山女学園大学）からはいくつもの貴重なコメントをいただいた。記して感謝の意を表したい。

あふれた社会を、整然としたものに調整していく (fix the rank) のに、手助けになると考えられるからである。(Henderson 1895=2004:84)

こうしたヘンダーソンの影響を受けてか、1910年代のバージェスの論調は力強いものがある。創成期のシカゴ学派の人道主義の立場を合理化して、そのまま論文という形でまとめているような感がある。バージェスが1916年に助教 (assistant professor) としてシカゴ大学社会学科に奉職した当時は、ジェーン・アダムズらが開設したセツルメント、すなわち福祉支援施設のハルハウスと関係を持って研究調査が進められていた時代であった。ハルハウスに滞在していた経験もあるバージェスが、社会改革の影響を受けていたことを、象徴的にあらわす論文が、「ソーシャル・サーベイ」(1916) である (Burgess [1916] 1974)。発表された時期を見れば分かるように、この論文は、社会改良主義の機運が高まっていた時代に書かれたものである。この論文で述べられているのは、バージェス自身がフィールド責任者 (director) としてかかわったローレンスにおけるソーシャル・サーベイである。バージェスは、「社会学者もなかに入り込んで、その研究作業の指揮をとったり組織したりするように要請されたコミュニティのサーベイ」が望ましいと考えていた。つまり、社会学者もなかに入り込んでコミュニティぐるみでの活動をおこなうサーベイをおこなうことで、社会に対してより大きな貢献ができると考えていたのである。その論文の締めくくりとして、バージェスは以下のように述べている。

コミュニティもまた、自らの社会問題にますます鋭く気づくようになってきており、それらの解決に助力を与えてくれるような社会学科に目を向けつつある。社会学者の課題は2つある。1つは、大学の専門家と州の各部局の協力を確保すること、そしてもう1つは、専門家の指揮のもと、自分たちのことを調査するためのコミュニティを組織することである。以上のような理由によって、ソーシャル・サーベイは、社会学科による建設的なサービスをおこなうための一つの魅力的な分野なのである。(Burgess [1916] 1974: [500] 272)

1920年代に入ると、改良主義的な志向はだんだんと薄れていく。「この頃になると、かつては社会学と不可分の関係にあったソーシャル・ワークも、ちょうど離婚夫婦の間のような冷えを背後に残しながら、独自の学部や専門機関で教育が行われるようになり、しだいに社会学とはたもとを分かつようになっていた」とフェアリスも述べている (Faris [1967] 1970=1990: 35)。

## 2. 社会計画と科学概念——1930年代

1918年、第一世代のトマスが不運なスキャンダルで追放されたあと、シカゴ学派は「科学」の時代を迎える。パークとバージェスの『科学としての社会学入門』、つまり「グリーンバイブル」をまさに聖書とする黄金時代の到来である。この時代の大きな方法論的枠組みは、人間

生態学であり、そのひとつの象徴的論文が、パークとバージェス編『都市』（1925）所収の、バージェス著「都市の成長——調査プロジェクト序説」である。有名な同心円地帯モデルが打ち出されたこの論文では、「都市の拡大」、および「都市の拡大と密接に関連している都市の新陳代謝作用（urban metabolism）と流動性（mobility）というあまり知られていない過程」を扱うものであると述べられている（Burgess [1925] 1967=1972:50）<sup>5)</sup>。この生態学的過程を強調する同論文が、「たたき台」としているのは、実は実践的な計画論である。つまり政策学や経済学など異分野でとりおこなわれていた計画論の不十分さを指摘している。とはいえ、バージェスが計画論を放棄していたわけでは決してない。そうではなくて、従来の計画論の静態的な性格を批判することで、別の論考にもわたって社会学的な社会政策・計画のあり方について考えたのである。

とくに1930年代以降、実践社会学は、「社会計画」という概念で遂行された。それは、第一世代のシカゴ学派の社会学者に見られた、狭義のキリスト教や社会改良主義と結びついた実践社会学とは性質を異にするものである<sup>6)</sup>。バージェスもこの時期、「社会計画」という概念で、ある意味で、科学に対する思い入れをこめていたのかもしれない。第一世代のシカゴ学派では、社会改良主義と深い結びつきをもった実践社会学が施行された。その一方、第二世代のパークやバージェスが巨匠として力を持った時代には、グリーンバイブルのタイトルに象徴されるように、改良主義ではなくて「科学」が前面に押し出された。1930年代の社会計画は、この時代背景を受けて、科学的な計画論とは何かが検討された。ここでの科学は、その意味が微妙に変化するものであるが（西川 2007）、ともかくここでの科学とは「社会学という科学」、あるいは「科学としての社会学」である。

さらには、現在の社会学で言われているように、「社会計画という言葉が発せられるときには、計画化された社会政策という以上の意味が込められることもある」（武川 2003:219）。これに関しては、当時、シカゴ学派第三世代のルイス・ワースによって翻訳が検討されていたマンハイムの考え方が影響している可能性がある。すなわち、マンハイムの「自由のための計画」の考え方が影響しているかもしれない。マンハイムの場合、社会計画とは、「左右の全体主義に反対するためのものであった」（武川 2003:219）。では、バージェスの場合、「社会計画」という言葉にはどのような意味を込めていたのだろうか。もちろん、当時、社会計画はひとつのブームであり、アメリカ社会学会の機関紙でも、社会計画特集が組まれたという背景もある。この潮流は別にして、バージェスは、「社会計画とモーレス」論文で、社会学者が活動的に社

- 
- 5) 人間生態学の自然科学にも似た性格は、政策的含意を排除するものではなくて、むしろシカゴ学派第一世代の社会改革的なドグマティズムからの脱却を図ろうとした試みとしてとらえることができる。バージェスは、父が牧師であることもあり、初期の段階から社会改革的な視点を持っていた。そのため、人間生態学の文献ととらえられる『都市』所収の「近隣住区事業は科学的基礎をもち得るか」論文などでは、最初からソーシャル・ワークへの応用という視点が見られる。
- 6) ヘンダーソンやブレッキンリッジ、E・アボットらの社会改良の運動では、実証的なデータではなくて、宗教的ドグマにもとづく視点からの改革を構想していた。たしかにソーシャル・サーベイもおこなっていたのだが、科学的吟味に欠けたものとして、第二世代のパークやバージェス以降、批判されることになった（cf. Kurtz 1984:12-15）。

会計画にかかわっていることを好ましいこととしている。しかし、社会学者の独自性が発揮された社会調査が、社会学者によってとりおこなわれているかという点、必ずしもそうではないことを問題視する。「社会学者たちよりも、他の社会科学者のほうがうまく調査を遂行しうることがよくある」のである（Burgess [1935] 1974：[1-2] 289）。そこで、経済学や政治科学が無視してきた文化的側面を取り扱うところにこそ、社会学的意義があると主張することで、サムナーを超えた彼独自のモーレス論を展開させる。バージェスはつまり、「社会計画」の概念のなかで、社会学者がなしうること、社会学の独自性について真剣に考えようとしたのである。社会計画は何も、政治学や経済学の専売特許というわけではない。むしろ、異分野とされてきた社会計画の分野にこそ、社会学の独自性が発揮される土壌があるのである。ここで、文化や人間性などをはじめとした「経済学や政治科学が見過ごし、無視してきたもの」としているものが、社会学の独自性が発揮される対象である。

### Ⅲ 社会福祉と老年社会学——1950年代以降のテキスト

#### 1. 近代化論と老年社会学

バージェスは、社会学者がとりおこなう社会計画において、無視し得ないアメリカ人のモーレスとして、「民主主義」「個人主義」「人道主義」の3つを挙げている（Burgess [1935] 1974）。わけでも、バージェスの説いた社会計画における「人道主義」は、現在では、福祉社会論のなかで展開されている。個人の問題は、個人の自助努力でなんとかすべきだとされた時代から、狭義の個人主義の「夜警国家」、「自由放任主義（レッセフェール）」の時代を経て、「近代」的な、個人に介入する福祉国家の時代が到来したといわれる。現在では、社会問題と自己の関係については、自己責任論や、「ネオリベラリズム」批判論などさまざまな立場があるが、ともかく、人道主義を信じる20世紀中庸のバージェスは、多くの学者の例に漏れず、福祉社会論に関心を寄せていくことになる<sup>7)</sup>。

バージェスの社会学史上の業績について、たとえばフェアリスは、次のようにまとめている。「バージェスは、都市研究の隆盛に重要な役割を演じ、家族研究の分野および社会解体研究の分野において多くの調査研究を促進させた。シカゴ大学におけるその晩年と退職後は、高齢者と退職等の問題分野での重要な調査研究に従事した。パークと同様バージェスも、数多くの有能で生産的な研究者を育てることで社会学に貢献した」（Faris [1967] 1970=1990：213）。現代の社会学史の世界でもあまり知られていないが、フェアリスも指摘しているように、バージェスは晩年、彼の「家族」への関心から展開した社会老年学に関する論考をいくつか残して

7) 後年、人道主義は、社会福祉と一体化して語られるようになってくる。たとえば、価値と社会問題についてバージェスらの文献に依拠するハイムズは、アメリカ人のエートスの特質を表す、基本的な価値のタイプを、1. 〈社会組織〉の価値、2. 〈個人主義〉の価値、3. 〈人道主義と社会福祉〉の価値 の3つに分けている（Himes 1955）。

いる。

たとえば、その一例が、人間生態学の考え方を残し、1940年代のR・S・キャバンらとの共同研究のひとつの結果でもある1950年の「老年期における個人的・社会的適応」論文である。20世紀に入ってから、高齢化（エイジング）に対する個人的・社会的適応に関心が高まっていると彼は述べる（Burgess [1950] 1980：138-140）。その上で、その要因として、近代化の3つの要件を挙げている。その3つとは、「1. 田舎から都会的な文明への移行」「2. 社会変動の速さ」「3. 変化する家族関係」である。こうした近代化論は、後期バージェスの老年社会学に通底する枠組であるように思われる（cf. Burgess 1960a：5-13=1975：24-28）。

バージェスは、『西欧諸国における老人問題』を編纂しているが、そこでも、バージェスは、社会政策に関心を寄せる。すなわち、「西洋諸国では高齢者に影響をおよぼす家族関係の変化が生じてきており、近年、高齢者に関する家族生活の研究がさかんになってきた」ことを背景にして、「それらの研究の成果が社会政策とどのように関連するか、またそれらの研究の成果が高齢者の家族関係に反応するとき、社会政策にどのような傾向があらわれているか」ということに関心を寄せている。付言すれば、高齢者の家族関係については、イギリス、西ドイツ、スウェーデンがもっとも関心を示し、イタリアでは高齢者の施設保護の可能性についての関心が強いと指摘している（Burgess 1960b：292=1975：488-489）。

とくにバージェスの晩年の社会福祉論は、近代化論の文脈で語ることを意識しているかのようである。次のバージェスの記述は、同僚であったオグバーンの有名な「家族機能縮小説」と呼ばれる見解と似た見方をあらわしている。

かつて西欧諸国においては、生活に困窮している老親を扶養するのは成人した子どもにとって道徳的、法律的な義務であった。病気になったり、からだが不自由になったときには、たがいに助け合い看護しあうことをたがいに期待していた。そして、親族間の相互扶助は拡大家族の間ではとくに強かった。しかし成人した子どもが老親を扶養し、看護するという義務感は、社会保険や医療サービス、コミュニティ・サービスの確立とともに後退していった。（Burgess 1960b：276=1975：459）

1970年代には、高齢化（エイジング）や高齢者という概念は、社会の近代化の程度と関連していると論じられる（Cockerham [1991] 1997：63）。そうした議論によれば、近代化は、高齢者に与えられる地位や尊敬の度を低減させるという。バージェスは、1980年代に展開される近代化論における高齢化の理論を先取りするかのようである。バージェスは、アメリカの実情について、次のように述べている。

かつての農村における社会的な関係は血縁が中心であった。したがって家族制度が確立しているところでは、祖父母の役割は、はっきりと決まっており、その権限は大きく、そ

の地位は高かった。しかし、都会では、だんだんと、家族、血縁との関係よりも、職業上の利益や、考え方、価値観を同じくする人たちとの関係の方が強くなってきた。家族・血族関係のきずなはなお残ってはいるが、もはや、それは中心となるものでも、また、重大なものでもない。したがって、高齢者は、かつては絶大な権力を有していた。「としよりの座」から退けられ、その価値を下げられたと感ずるに至った。もはや、子どもや孫の運命を握る家長としての役割など期待することはできなくなった。それどころか尊敬すらされないのかもしれない。要するに、支配者としての昔の役割を失ったものの、そうかといって新しい役割はまだ見いだされていないという状態である。(Burgess 1955 : 50-51, 1960b = 1975 : 452-453)

もちろん、こうした近代化論に対する批判があることも、現代のわれわれは知っている(Cockerham [1991] 1997 : 65)。現在後発国といわれる国々が、先進国が近代化の過程でたどってきた同じ道筋をたどるのであるか。かならずしもそうは主張できない。また、先進国のあいだでも近代化の過程は必ずしも一様ではない。高齢者の社会的地位が低いという事象が普遍的ではないことは、わが国日本などの事例と比較してみたときに明らかになる。

バージェスは、非行少年などを初めとした、ある社会的・慣習的コントロールから解放された人びとの生活をどう組織化していくかに関心を持ち続けた。同じように、近代化は、高齢者にとって従来の家族システムのコントロールからの解放を意味していた。

工業化と都市化の影響のもとで、三世代家族は、最初は、密接に結合された社会的ユニットであったが、今は世帯としても、生産ユニットとしても、崩壊した。そして、それは現代生活に適応した、世代間の新しい関係の発展とともに、社会的ネットワークに変わりつつあるのである。(Burgess 1960c : 297 = 1975 : 497)

## 2. エイジングと社会政策

こうした近代化論の老年社会学の文脈において、バージェスは、高齢者の生活の組織化に向けて、どのような政策像を描いていたのであろうか。高齢者の価値観や望みを考慮に入れた社会政策について、具体的にバージェスの考察を検討してみよう。バージェスによれば、概要としてその政策のために注目すべきは、以下の9つの点であるという(Burgess 1955 : 53-57)。

第1に、仕事である。仕事の価値は、若い人と同じくらい、高齢者にとっても重要な意味を持っている。それゆえ、高齢者が続けて仕事に従事できるように、あらゆる努力がなされるべきである。とある研究結果によれば、健康状態の要因をコントロールした場合でさえも、仕事をやめた人よりも仕事を続けている人は、社会環境によりよく適応できるという。こうしたことからバージェスは、体力・エネルギーなどそれぞれの高齢者の条件に見合った、生活年齢に変わる新しいエイジングの基準を用いることの必要性を強調する。

第2に、レクリエーションである。退職した人びとは、仕事場に拘束されることがない。そのため、可能な範囲で、自由に好きなところに住むこともできるし、旅行もできる。こうして「抑圧された欲望」や秘められた野心を表出できる。

第3は、経済的安定性である。社会の近代化とともに、資産を持っていたり、自分の子ども達から経済的援助を受けたりすることのできた時代は、過ぎ去ってしまった。そこで、近代社会における高齢者の収入源は、主に次の3つである。第1に、「老齢遺族保険 (old-age and survivorship insurance)」などの公的な保証制度である。第2に、会社と組織がスポンサーとなる、拋出制、非拋出制の制度である。第3に、高齢者自身が、自分の子どもたちやその他親戚、友人から得られるものである。

第4に、心理学的安定である。高齢者たちは、社会のなかで自分たちの役割がなくなっていくことに不安を感じている。これは2つの方法で対処しうる。1つの方法は、「学ぶには遅し」「運動は体に毒」など、現在の間違ったステレオタイプを正そうとする教育のキャンペーンを企画することである。2つめの方法は、生産能力、社会に対して貢献できる能力があることを実際に示してみせることである。

第5は、住まいに関する安心である。退職の際、自分の家を所有する人や夫婦は、借家暮らしの人に比べて、心理学的にも、経済的にも、問題に直面することが少ない。たとえ財政上、身体上などの問題で、施設に入ることになったとしても、たとえば自分の家具を持ちこむなどして、できるかぎりあらゆる点にわたって家らしい特徴を持った雰囲気を作ることが望ましいとバージェスは言う。

第6は、家族関係である。自分の子ども、孫、ひ孫は、高齢者にとってかけがえのない存在である。ある調査によれば、異なる世代間で良好な関係を保つためには、おのおの別々に生活するが、お互いに十分な接触とコミュニケーションを維持することが重要だという。社会政策の策定にあたっては、こうした知見を考慮に入れる必要があるとバージェスは論じる。

第7に、友人である。高齢者は、何らかの理由で、友人を失うということを経験しがちである。そこで、新しい友人を作ることが、重要な問題となる。インフォーマルな社会集団やフォーマルな組織へ加入することは、この目的に沿った一つの方法である。当時、移動式共同生活住居のトレーラーハウスで生活する高齢者が増えており、注目された。

第8は、組織の一員であり続けることである。人が占める役割や地位は、部分的にせよその人が属している組織に依存している。そこで組織は、退職の年を迎えた成員に、しかるべき名目つき、あるいは無くてもよいので、名誉待遇の地位以上のものを与えるべきである。退職する人々にとって重要な位置を占めている組織に対して、予算が配分されるべきである。

第9として、新しい組織への加入がある。高齢期に感じる孤独感、寂しさ、無価値感は痛烈である。しかし、退職後は、さまざまな活動や組織に参加する時間がある。高齢者に、新しい活動や冒険の可能性を紹介するメディア、あるいは組織が求められた。

初期シカゴ学派の文献の多くには、社会が田舎の農耕システムから都市の産業経済へ変化す

ることによって、社会や人びとにどのような変化があらわれたかが描かれている。後期バージェスの老年社会学は、初期シカゴ学派の人びとが持っていた近代あるいは都市社会に対する関心がよくあらわれているようにも思われる。シカゴ学派の政策社会学の存在を指摘する研究においてさえも (Kurtz 1984)、バージェスの老年社会学における政策・福祉論はあまり触れられることがなく、検討が進んでいない。バージェスの老年社会学におけるこのようにバージェスは、1950年代において、エイジングをめぐる社会政策の概要を描いている。社会改良主義から社会計画、そして福祉社会論へと社会政策の立場を変容させてきた。社会政策は現在、福祉社会論との関連で議論されることが多い。そして、バージェスの社会政策論の一つの帰結点も老年社会学における福祉社会論である。

#### Ⅳ バージェスの社会政策論のインプリケーション

以上のように、バージェスは、社会政策論の文脈において、1910年代の社会改良の立場にもとづくサーベイ論、1930年代の科学にもとづく社会計画論、1950年代以降の老年社会学における福祉社会論へと展開していった。こうした展開過程は、単なる変遷ではなく、現代の福祉社会論にとってもいくつか知識社会的な洞察をもたらしてくれると思われる。

本稿の冒頭でも述べたことであるが、本稿を終えるにあたり、こうした展開過程から導き出される、3つの意義を結論として示しておきたい。

第1は、これまでシカゴ学派社会学において軽視され続けていた、社会政策論という側面である。ジャンヴィッツが指摘するように、多くのシカゴ社会学者たちは、社会政策的な側面を、いわば科学的研究から「派生するもの」という位置しか与えてこなかった (Janowitz 1973)。もちろん、初期シカゴ学派の人間生態学は、これまで考えられてきた以上に、学説史上、大きな意義を有している (西川 2003a; 2003b; 2004)。ただし、1980年代に、カーツが控えめに指摘していたように、「社会政策 (social policy)」という領域も、シカゴ社会学のなかで一定の位置を占めていた (Kurtz 1984: 80)。人間生態学と対となる社会政策もまた、シカゴ学派社会学の一つの領域ととらえることが社会学史そして社会学的方法論上、有益である。

第2に、人間生態学の枠組み同様、主に当時のアメリカのシカゴという激動の時空間がモデルになっており、このために現代にも参考になるインプリケーションが得られる。すでに見てきたように、バージェスは近代化を背景に福祉社会学を構想しているが、現代日本の団塊世代の退職問題など、高齢者一般を問題とする際、その社会政策論は大きな参考となる。

第3の点はとりわけ重要である。それは、社会学的社会政策史上の意義である。社会政策論上は、現在のあらゆる「社会政策・社会計画・福祉国家」(武川 2003: 210)の諸問題の萌芽が認められるのである。このことは、バージェスの社会政策論の展開過程から導き出される。現在の福祉社会論を参照しながら、もう少し敷衍してみよう。

社会改良から社会計画の展開から見えてくるものは、パークでなくてバージェスが志向した

「科学としての社会学」の推進である。「社会計画」の用語は、科学性を強調した表現であるとも現在言われているように（武川 2003：219）、バージェスも、「社会改良」の時代以上に、社会学が基盤とする科学に特別な思いを込めていた。第一世代のシカゴ学派では、社会改良主義と深い結びつきをもった実践社会学が施行された。第二世代のパークやバージェスが巨匠として力を持った時代には、改良主義ではなくて「科学」が前面に押し出された。1930年代の社会計画は、この時代背景を受けて、科学的な計画論とは何かを検討された。当時、ルイス・ワースによって紹介されていたマンハイムが「社会計画」の用語に社会批判の思いを込めていたように、バージェスも「社会計画」の用語に、「科学としての社会学」の熱い思いを込めていたように思われる。後年ではあるが、バージェスの場合も、彼自身の1930年代のアメリカ人のモーレス論を裏付けるかのように「社会科学者としての社会学者は、ある〈一つの価値〉は、勇氣を持って、力強く守り抜かなくてはならない。その一つの価値とは、思想、教育、そして調査をおこなう〈自由〉である」（Burgess [1954] 1974：[20] 313）と述べていたように、熱い主張をおこなっていた。

社会計画から老年社会学という福祉社会論への展開で見えてくるものは、先進諸国で福祉国家の形成が進んだ背後にある社会変動に関する論点である。初期シカゴ学派の社会学者たちが関心を寄せた、農村から都市へ、伝統社会から近代社会へという枠組みは、バージェスの手によって社会政策論にも生かされている。社会計画の背後には社会問題があり、社会問題の背後には、近代における社会権などの成立がある。多くの教科書の記述にもあるように、こうした議論は、自然と産業化および福祉国家の成立の議論へと導かれる。というのは、バージェスは1930年代には、19世紀の夜警国家、つまり、社会政策上の政府の役割が限定的である計画観を持っていた。「生産者であれ消費者であれ、アメリカの大衆のなかで作られるさまざまな自発的な連合集団は、最小限の政府の監督と規制のもとではぐくまれるべきである」（Burgess [1935] 1974：[15] 304）。バージェスの主張する「個人主義」のモーレスにもあるように、その背景には、国家が人々の私的な生活に介入するのは望ましくないとする考え方がある。だが、同時に、バージェスも指摘するように、「人道主義」のモーレスは、「社会改革への、そしてアメリカ合衆国に社会福祉制度を作ろうとする主な動機付けとなってきた」（Burgess [1935] 1974：[8] 295）。しかも、バージェスの論じたもう一つのモーレス、「民主主義」の発達も福祉国家の形成を後押しする。バージェスも論じていたような公的保証制度の制定は、民主主義に基づく普通選挙制がなければ促進されなかったものと思われる<sup>8)</sup>。

1950年代のバージェスの老年社会学は、近代化論を背景とするものになっている。バージェスも、産業化・都市化といった近代化の諸側面が、個人や家族関係に大きな影響を与えたこと

8) 社会福祉制度の出発点とされているのは、1601年にイギリスで制定されたエリザベス救貧法である。しかしこの法律は、時代背景から見ても分かるように人権・社会権にもとづいて制定されたものではなく、むしろ治安維持としての意味合いが強かったと言われている。アメリカでは、1920年に婦人参政権が導入され、1935年には、ニューディール政策の一環として連邦社会保障法が制定された。

を随所で強調していた。彼の社会計画論において強調されたアメリカのモーレスである「個人主義」「民主主義」「人道主義」は、それぞれの関係が矛盾を抱えながらも、福祉国家の形成に大きな影響を与えたのだと示唆しているかのようである。バージェスの社会政策論上の議論は、20世紀の「福祉国家形成の背景」と響きあっているばかりか（武川 2003：223）、アメリカの3つのモーレスのあいだの関係を調停し、さらには「改良・計画・福祉」という、バージェスの業績上ならびに社会政策研究史上の論点を「総合」しているようにも思われる。現在を近代と断絶したものと見るにせよ、連続したものと見るにせよ、バージェスの社会政策論は、社会政策・福祉などに関して現代議論すべき論点の多くを、原初形態として示してくれているかのようである。

#### 参考文献

- 井上真理子（2001）「臨床社会学の構築をめぐる：文化の臨床」『現代社会研究』1，pp. 53-64.
- 鎌田大資（2005）「サザランドとバージェス：犯罪学における交流と交錯」宝月誠・進藤雄三編『社会的コントロールの現在：新たな社会的世界の構築をめざして』世界思想社，pp. 449-474.
- 高山龍太郎（1998）「カリキュラムにみる初期シカゴ学派：1905年から1930年まで」『京都社会学年報』6，pp. 139-162.
- 武川正吾（2003）「社会政策・社会計画・福祉国家」福祉士養成講座編集委員会編『新版 社会福祉士養成講座11 社会学 第2版』中央法規，pp. 210-225.
- 西川知亨（2003a）「初期シカゴ学派とE・F・フレイジア：人間生態学的方法の「極相」と「萌芽」」『ソシオロジ』48（2），pp. 91-107.
- （2003b）「初期シカゴ学派と人間生態学」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社，pp. 263-264.
- （2004）「社会調査と人間生態学的方法：初期シカゴ学派におけるE・F・フレイジアを中心に」『社会学史研究』26，pp. 129-143.
- （2007）「E・W・バージェスと社会調査：「科学」の意味に注目して」『社会学史研究』29，pp. 87-100.
- 藤澤三佳（2000）「医療と臨床社会学のパーспекティブ」大村英昭編『臨床社会学を学ぶ人のために』世界思想社，pp. 47-70.
- 丸木泰史（2000）「精神科デイケアセンターとインスティテューショナルリズム：E. ゴッフマン『アサイラム』再考」『大阪医科大学紀要人文研究』31，pp. 51-73.
- Burgess, Ernest W. (1916) "The Social Survey: A Field for Constructive Service by Departments of Sociology", *American Journal of Sociology*, 21, pp. 492-500. = Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds., (1974) *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, pp. 264-272 (ISBN 0-22608-057-9).
- , ([1925] 1967) "The Growth of the City: An Introduction to a Research Report", Robert E. Park and Ernest W. Burgess and Roderick D. McKenzie, *The City: Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment*, Chicago: The University of Chicago Press, pp. 47-62 (ISBN 0-22664-611-4) (大道安次郎・倉田和四生訳「都市の発展：調査計画序論」『都市』鹿島出版会，1972年，pp. 49-64).
- (1927) "Statistics and Case Studies as Methods of Sociological Research", *Sociology and Social Research*, 12, pp. 103-20. = Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds. (1974) *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, pp. 273-287 (ISBN 0-22608-057-9).
- (1930) "Discussion", Clifford R. Shaw ([1930] 1966) *The Jack-Roller: A Delinquent Boy's Own Story*,

- Chicago: The University of Chicago Press (ISBN 0-22675-126-0) (玉井眞理子・池田寛訳『ジャック・ローラー』東洋館出版社, 1998年, pp. 293-312).
- (1935) “Social Planning and the Mores”, *Publication of the American Sociological Society*, 29 (3), pp. 1-18. = Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds. (1974) *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, pp. 288-306 (ISBN 0-22608-057-9).
- (1945a) “Sociological Research Methods”, *American Journal of Sociology*, 50 (6), pp. 474-482.
- (1945b) “Research Methods in Sociology”, Georges Gurvitch and Wilbert E. Moore ed., *Twentieth Century Sociology*, New York: Philosophical Library (内藤莞爾訳『社会学研究法』誠信書房, 1959年).
- ([1950] 1980) “Personal and Social Adjustment in Old Age”, Milton Derber ed., *The aged and Society*, New York: Arno Press, p. 138-157 (ISBN 0-40512-783-9).
- (1954) “Values and Sociological Research,” *Social Problems*, 2 (1), pp. 16-20. = Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds. (1974) *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, pp. 307-313 (ISBN 0-22608-057-9).
- (1955) “Human Aspects of Social Policy”, *Old Age in the Modern World: Report of the Third Congress of the International Association of Gerontology*, Edinburgh and London: E. S. & Livingstone Ltd, pp. 49-58.
- (1957) “The Older Generation and the Family”, Wilma Donahue and Clark Tibbits, *The New Frontiers of Aging*, Ann Arbor: University of Michigan Press, Ch. 12. = Bogue J. Donald ed. (1974) *The Basic Writings of Ernest W. Burgess*, Community and Family Study Center, Chicago: University of Chicago, pp. 338-45.
- (1960a) “Aging in Western Culture”, Ernest Watson Burgess ed. (1960) *Aging in Western Societies*, Chicago: The University of Chicago Press, pp. 3-28 (ISBN 0-22608-053-6) (森幹郎訳『西欧諸国における老人問題』社会保険出版社, 1975年).
- (1960b) “Family Structure and Relationships”, Ernest Watson Burgess ed. (1960) *Aging in Western Societies*, Chicago: The University of Chicago Press, pp. 271-298 (ISBN 0-22608-053-6) (森幹郎訳『西欧諸国における老人問題』社会保険出版社, 1975年).
- (1960c) “Résumé and Implications”, Ernest Watson Burgess ed. (1960) *Aging in Western Societies*, Chicago: The University of Chicago Press, pp. 377-388 (ISBN 0-22608-053-6) (森幹郎訳『西欧諸国における老人問題』社会保険出版社, 1975年).
- Cockerham, William C. ([1991] 1997) *This Aging Society*, Englewood Cliffs, N.J.: Prentice Hall (ISBN 0-13651-092-2).
- Faris, Robert E. L. ([1967] 1970) *Chicago Sociology: 1920-32*, Chicago: The University of Chicago Press (ISBN 0-22623-819-9) (奥田道大・広田康生訳『シカゴ・ソシオロジー 1920-1932』ハーベスト社, 1990年).
- Glazer, Nathan (1966) “Forward”, Edward Franklin Frazier, *The Negro Family in the United States*, Chicago: The University of Chicago Press, pp.vii-xviii (ISBN 0-22626-140-9).
- Henderson, Charles R. (1895) “The Place and Functions of Voluntary Associations”, *American Journal of Sociology* 1 (1), pp. 327-334 (新井智浩訳「ボランティア・アソシエーションの場と機能」『人間と社会の探求』59, pp. 81-90, 2004年).
- Himes, Joseph S. (1955) “Value Analysis in the Theory of Social Problems”, *Social Forces*, 33 (3), pp.259-262.
- Janowitz, Morris (1972) “Professionalization of Sociology”, *American Journal of Sociology*, 78 (1), pp. 105-135.
- (1973) “Introduction”, Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds., *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, pp. 261-287 (ISBN 0-22608-057-9).
- Kurtz, Lester R. (1984) *Evaluating Chicago Sociology: a Guide to the Literature, with an Annotated Bibliography*, Chicago: The University of Chicago Press (ISBN 0-226-46476-8).